

# 古典単元の定位と構成

水 田 潤

## 1

古典は、こんにち青少年たちからは加速度的に遠ざかりつつある。これは、たんに古典のもつ言語抵抗のかべの厚さだけではない。また、国語教育で古典が軽視されているからという理由だけによるものでもない。古典的思考様式や美的感覚は、こんにちの日本人の中に根つよく生き、日本の特性を形成してはいるが、これらは、もはや現代の青少年たちのものではない。共感としての普遍性ももたない。それは、こんにちの青少年たちの思考様式や感覚と、古典の世界観との断層、隔絶感によつてゐる。

昭和三十三年版の新しい「中学校学習指導要領」では、国語科の目標の一つで、心情を豊かにし、教養を高めることをめざし、古典教育についても、「基本的なものに適宜触れさせ、古典に対する関心をもたせるように留意する。」とあるが、「基本的なものに適宜触れさせ」「古典に対する関心をもたせる」とは、いったいどのようななしかたをさすのか。たとえば、現行の中学校国語教科書の編集者たちの多くは、これを次のように理解する。

- (1) 代表的な日本古典に対して、親しみとひとりの理解を与

える。

- (2) 代表的な日本古典に関心をもたせ、教養のための読書態度を確立させる。

ある教科書編集者は、これを次のように解説する。

- (1) できれば、年代順、ジャンル別に分類させて、ひとりの理解を与える。

- (2) 源氏物語や枕草子をはじめ、日本の代表的な古典に触れさせて、教養を深める。

ここでは、「古典は基本的なものに……」として示される「基本的」の意味も、たんに定評のある古典という程度にしか理解されていない。古典の文化史的整理や体系づけ、日本文学の伝統としての情趣性の強調によって、何を期待しようとするのであろうか。古典的思考様式や美的感覚と、こんにちの青少年たちとの断層が、こんな方法で埋められるとは思われない。新しい古典教育は、むしろこうした文化主義や情趣性の克服からはじめられなければならないのではない。

これまで、国語教育で古典教育を論じる場合、基本的には、文学鑑賞か文学研究かについて論じられ、文学教育は文学研究ではない



ことが確認されてきた。また、一方では、古典教育論の名において、規範論、現代的意義論、古典認識論などいくつかの立場があり、これらは、いずれもその優位性を主張しあったまま現在にいたっている。こんにち、国語教育で古典教育を論じる場合、その立場をいずれにおくかはかならずしも明確ではない。文部省もこのことは明らかにしていない。ただはっきりと言えることは、かつて中世や近世の文壇や思潮、あるいはまた戦前、戦中の時代思潮が古典復興を言ったような古典憧憬の思想をその発想とはしていないことである。

いかに規範論の立場に立つとしても、こんにちの日本に、思想的な古代復古を古典教育に期待するものはない。かつて久松潜一博士は、古典尊重を、「憧憬」の心の表われと見、この思想の歴史的にあらわれる過程を、(1)因襲に対する不満から生じた古に対する憧憬。(2)その古を認識しようとする知的探求。(3)認識し得た古を思想生活や芸術表現の上にあらわそうとする意志。(4)古代精神の真の体験。の四点から論じられたが、現在、国語教育でいう古典の教育が、このいずれでもないことはいうまでもない。

しかし、こんにちわれわれが、古典教育で、いずれの立場に立つとしても、問題の中心は、何を古典の「伝統」と見、これをどのように「継承」するかにある。このことに古典教育のすべてがかかっている。伝統の継承が、たんなる古文化の保存でなく、また伝統の名を冠して古典を理解するという程度のものでなく、教育としての志向をもつとすれば、問題は決して単純ではない。特に入門期の古典教育は、方法を誤れば、永久に古典に背を向ける人間をつくってしまう。

ここで入門期というのは、主として中学校三年間の時期をさす。

昭和二十六年版、昭和三十三年版の旧新しいれの「学習指導要領」でも、この時期を特に古典学習の入門期とした規定はないが、たとえば、前掲の「古典は基本的なものに……」（昭和三十三年版）の記述や、「……中学生になれば、興味ある古典や外国の文学作品などを読んで教養を高めていく」（昭和二十六年版）、「指導にあたっては……古典をわかりやすく書きかえた文章……」（昭和三十三年版）などに、その入門期としての性格は読みとることができる。また、次の指示は、とりもなおさず中学校での古典学習の入門期的性格を示したものである。

〔昭和二十六年版 中学校学習指導要領 国語科編〕

・ 注釈を利用したりしてやさしい古典の物語を読む。（「読むこと」の各学年の具体的目標、第二学年）

・ 古典については、特に生徒の実態に即して選んだり与えたりする。（「読むこと」の各学年の指導上の注意、第三学年）

〔昭和三十四年版 中学校国語指導書〕

・ 中学校の生徒の学力では、古典を原文で自由に読み取ることには無理であるから……第3学年になって原文を教材として出すのであるが……それらは、現代語訳を合わせて示すとか、注釈をつけるとか、書き下しにするとか……。

・ わが国のことはや文学についても考えさせ、古典に親しみ、その内容をくみとり、祖先や思考や心情をうかがい知ること



なる。(第2章 各学年の目標および内容 第2節 各学年の内容 3 読むこと)

入門期古典学習の基本的な目標としては、やさしい古典を、生徒の実態に即して選んだり与えたりすることによって、祖先の思考や心情をうかがい知ることがめざされるわけであるが、この基本的な目標の上に立って、古典をどのように単元として定位させ、教材として構成するかが問題となる。生徒の実態に即するとは、たんに言語抵抗の少ないやさしい物語、注釈や書き下しといった方法上の手段だけの問題ではない。

古典教材を、内容・形態の上から整理すると、(1)随筆紀行群、(2)小説物語群、(3)民話説話群、(4)笑話群、(5)記録地誌伝記群、(6)日記群、(7)戯曲群、(8)評論群、(9)詩歌群などとなる。入門期という限定に立った場合、学習者にとって興味ある古典とは、常識的には(2)(3)(4)の中に求められるが、これはあくまでも一般論であり、このことの決定は、群内の作品個々各編の性格や、叙述・展開の様式や内容に負うところが大きい。

いまこころみに、昭和三十六年度使用(昭和三十七年度より中学校、昭和三十八年度より高等学校の教科書が改訂される)の中・高等学校の国語教科書(高等学校乙を除いて)の古典教材の提出頻度を群別に見ると、次のようになっている。

# (1) 随筆紀行群 636

(中学校)

① 56  
② 31  
③ 12  
⑫ 2

(高等学校)

① 206  
② 156  
③ 132  
⑫ 37  
⑬ 2  
⑭ 1

## (2) 小説物語群 315

⑦ 23  
⑧ 6  
⑨ 3  
⑩ 3  
⑪ 1  
⑫ 1  
⑬ 1  
⑭ 1  
⑮ 1  
⑯ 1  
⑰ 1  
⑱ 1  
⑲ 1  
⑳ 1  
㉑ 1  
㉒ 1  
㉓ 1  
㉔ 1  
㉕ 1  
㉖ 1  
㉗ 1  
㉘ 1  
㉙ 1  
㉚ 1  
㉛ 1  
㉜ 1  
㉝ 1  
㉞ 1  
㉟ 1  
㊱ 1  
㊲ 1  
㊳ 1  
㊴ 1  
㊵ 1  
㊶ 1  
㊷ 1  
㊸ 1  
㊹ 1  
㊺ 1  
㊻ 1  
㊼ 1  
㊽ 1  
㊾ 1  
㊿ 1

## (3) 民話説話群 70

① 10  
② 6  
③ 13  
④ 4  
⑤ 4  
⑥ 4  
⑦ 4  
⑧ 4  
⑨ 4  
⑩ 4  
⑪ 4  
⑫ 4  
⑬ 4  
⑭ 4  
⑮ 4  
⑯ 4  
⑰ 4  
⑱ 4  
⑲ 4  
⑳ 4  
㉑ 4  
㉒ 4  
㉓ 4  
㉔ 4  
㉕ 4  
㉖ 4  
㉗ 4  
㉘ 4  
㉙ 4  
㉚ 4  
㉛ 4  
㉜ 4  
㉝ 4  
㉞ 4  
㉟ 4  
㊱ 4  
㊲ 4  
㊳ 4  
㊴ 4  
㊵ 4  
㊶ 4  
㊷ 4  
㊸ 4  
㊹ 4  
㊺ 4  
㊻ 4  
㊼ 4  
㊽ 4  
㊾ 4  
㊿ 4

## (4) 日記群 117

① 1  
② 1  
③ 1  
④ 1  
⑤ 1  
⑥ 1  
⑦ 1  
⑧ 1  
⑨ 1  
⑩ 1  
⑪ 1  
⑫ 1  
⑬ 1  
⑭ 1  
⑮ 1  
⑯ 1  
⑰ 1  
⑱ 1  
⑲ 1  
⑳ 1  
㉑ 1  
㉒ 1  
㉓ 1  
㉔ 1  
㉕ 1  
㉖ 1  
㉗ 1  
㉘ 1  
㉙ 1  
㉚ 1  
㉛ 1  
㉜ 1  
㉝ 1  
㉞ 1  
㉟ 1  
㊱ 1  
㊲ 1  
㊳ 1  
㊴ 1  
㊵ 1  
㊶ 1  
㊷ 1  
㊸ 1  
㊹ 1  
㊺ 1  
㊻ 1  
㊼ 1  
㊽ 1  
㊾ 1  
㊿ 1

## (5) 笑話群 37

① 3  
② 3  
③ 3  
④ 3  
⑤ 3  
⑥ 3  
⑦ 3  
⑧ 3  
⑨ 3  
⑩ 3  
⑪ 3  
⑫ 3  
⑬ 3  
⑭ 3  
⑮ 3  
⑯ 3  
⑰ 3  
⑱ 3  
⑲ 3  
⑳ 3  
㉑ 3  
㉒ 3  
㉓ 3  
㉔ 3  
㉕ 3  
㉖ 3  
㉗ 3  
㉘ 3  
㉙ 3  
㉚ 3  
㉛ 3  
㉜ 3  
㉝ 3  
㉞ 3  
㉟ 3  
㊱ 3  
㊲ 3  
㊳ 3  
㊴ 3  
㊵ 3  
㊶ 3  
㊷ 3  
㊸ 3  
㊹ 3  
㊺ 3  
㊻ 3  
㊼ 3  
㊽ 3  
㊾ 3  
㊿ 3

## (6) 評論群 271

① 2  
② 2  
③ 2  
④ 2  
⑤ 2  
⑥ 2  
⑦ 2  
⑧ 2  
⑨ 2  
⑩ 2  
⑪ 2  
⑫ 2  
⑬ 2  
⑭ 2  
⑮ 2  
⑯ 2  
⑰ 2  
⑱ 2  
⑲ 2  
⑳ 2  
㉑ 2  
㉒ 2  
㉓ 2  
㉔ 2  
㉕ 2  
㉖ 2  
㉗ 2  
㉘ 2  
㉙ 2  
㉚ 2  
㉛ 2  
㉜ 2  
㉝ 2  
㉞ 2  
㉟ 2  
㊱ 2  
㊲ 2  
㊳ 2  
㊴ 2  
㊵ 2  
㊶ 2  
㊷ 2  
㊸ 2  
㊹ 2  
㊺ 2  
㊻ 2  
㊼ 2  
㊽ 2  
㊾ 2  
㊿ 2

## (7) 戯曲群 18

① 2  
② 2  
③ 2  
④ 2  
⑤ 2  
⑥ 2  
⑦ 2  
⑧ 2  
⑨ 2  
⑩ 2  
⑪ 2  
⑫ 2  
⑬ 2  
⑭ 2  
⑮ 2  
⑯ 2  
⑰ 2  
⑱ 2  
⑲ 2  
⑳ 2  
㉑ 2  
㉒ 2  
㉓ 2  
㉔ 2  
㉕ 2  
㉖ 2  
㉗ 2  
㉘ 2  
㉙ 2  
㉚ 2  
㉛ 2  
㉜ 2  
㉝ 2  
㉞ 2  
㉟ 2  
㊱ 2  
㊲ 2  
㊳ 2  
㊴ 2  
㊵ 2  
㊶ 2  
㊷ 2  
㊸ 2  
㊹ 2  
㊺ 2  
㊻ 2  
㊼ 2  
㊽ 2  
㊾ 2  
㊿ 2

⑤ 1



③1 9 ③9 1 ③2 1 — ③7 5 ③9 4

一見して明らかのように、中学校・高等学校ともに、(1)随筆紀行群が圧倒的に多い。特に、中学校の場合、教材群としての随筆紀行文は、「基本的な古典」「やさしい古典」という「学習指導要領」の指示にしたがって、文字や語いの抵抗の少ない作品各編が選ばれている。しかし、言語抵抗の少ない日本の代表的な古典なら入門期の古典教材として適当と言えるかどうか。

われわれは、ここでもう一度、昭和三十四年版「中学校国語指導書」の次の記述について考える必要がある。

古典については特に生徒の実態に即して、選んだり与えたりする。

「生徒の実態に即して」とは、たんに、この期の学習者の言語能力だけをさすのではない。これは、学習者の必要と興味と関心の面からも考慮されなければならない。この点からも、教材群の選定についての態度が決定されなければならない。以下、(1)学習者の必要・興味・関心について、(2)随筆紀行群教材の特性について若干の考察を加える。

(1)学習者の必要・興味・関心——小学校六年ごろから中学校にかけての児童生徒の読書興味の中心は、随筆紀行よりもむしろ小説・物語にある。しかし、個人生活でも社会生活においても、心理的な面や、社会的な感情の発達がめだち、情緒や知的な思考力も発達し、外面的、集団的な生活から、しだいに内省的個人的な方向に目を向けることができるようになる。また、一方では、読書意欲も盛んになり、未知の世界に対する関心も高まってくる。思索的な随筆を読解する

能力も徐々にできてくる。この時期に、理解しやすい随筆形態の作品を与えることによって、その人間的な観照や、個性的な思考にふれさせ、美的な鑑賞眼を開き、その情操を豊かにすることが必要である。

(2)随筆紀行群教材の特性について——随筆形態の作品は、文字や語いの抵抗も比較的少なく、文章構造も単純なものが多い。それだけに、随筆は、感情や思想を直接的に表現することが少なく、かえって作者の思想や感情のくみとりは容易ではない。また、随筆の題材となるのは、作者の経験であり、とりあげられる事象も光景も、すべて作者の人生観、自然観を基調として整理されている。随筆の学習指導では、このことの認識から出発することが必要である。しかし、教材として採られている随筆は、時代、感覚の異った特殊な成人によって書かれたものである。随筆の学習によって、表現や感覚の美しさ鋭さを感じずるとは言っても、それは、ときに生徒の生活にほど遠く、理解しにくい特殊感覚である場合も少なくない。生徒のおどろきやよろこびと、おとなの感動との間には、かなりのひらきがあることも多い。

右の(1)(2)の認識にたった場合、古典教材としての随筆紀行群には、多くの問題が含まれている。教材の選択に当っては、この点にじゅうぶんの考慮が必要となる。また、この時期の生徒の興味や関心は、静的な風景や自然の推移よりも、変化のはげしい人事的なものに対する方が強い。随筆紀行群教材の定位については、単元設定、教材選択、展開に多くの課題を残している。かつての国語教育がおちいったような、おとなの教養のおしつけは、たんに古典の学習意欲をそぐばかりではなく、古典との断層をいよいよ深くする。



発達段階の上から見れば、中学生たちの多くは、いわゆる物語期の延長時代に属し、随筆紀行などのような静的なものよりも動的なものを、風物的なものよりも人事的なものへの関心が強い。冒険もの、伝記、歴史小説の類を愛好する。また、女子は成人感覚に近く、情緒的なものへの共感度も高い。古典教材の選択、単元の構成にあたっては、こうした視点からの配慮が望まれる。行動、冒険的なものとしては、たとえば紀記、平家物語などの英雄説話もよく、古事記の倭建命の哀話なども、共感を得られるであろう。

問題を具体的に見究めるために、こころみに古典教材としての平家物語に例をとって考えてみる。

すでに旧版に属するが、昭和三十六年度使用の中学校、高等学校国語教科書（高等学校乙を除く）に採られている「平家物語」の本文と、その頻度、単元名について見ると、次のようになる。（「」内の数字は中学校の頻度、〈〉内の数字は高等学校。改行の「」内は中学校での単元名と、同一単元名の頻度、〈〉内は高等学校。）

- (1) 祇園精舎〔2〕〈8〉
  - 〔・古典入門①・昔の物語①〕〈・中世の文学③・古典②・物語、草子①・平家物語①・謡曲①〉
- (2) 殿上闘打ち〔0〕〈4〉
  - 〈・中世の文学①・物語、草子①・平家物語①・こころ①〉
- (3) 童〔0〕〈2〉
  - 〈・中世の文学①・平家物語①〉
- (4) 赦文〔1〕〈3〉
  - 〔・楽しい読書①〕〈・古典の世界②・平家物語①〉
- (5) 少将都帰り〔0〕〈1〉
  - 〈・古典を読む①〉
- (6) 有王〔1〕〈3〉
  - 〔・楽しい読書①〕〈・古典の窓②・古典を読む①〉
- (7) 橋合戦〔0〕〈1〉
  - 〈・平家物語①〉
- (8) 月見〔0〕〈1〉
  - 〈・古典を読む①〉
- (9) 小督〔1〕〈5〉
  - 〔・古典①〕〈・中世の文学③・古典の世界①・平家物語①・小督①〉
- (10) 入道逝去〔0〕〈1〉
  - 〈・平家物語①〉
- (11) 忠度都落ち〔8〕〈4〉
  - 〔・日本の古典③・古典①・古典入門①・古典を読む①・古典の鑑賞・やさしい古典①〕〈・中世の文学①・古典の世界②・謡曲①〉
- (12) 池殿都落ち〔0〕〈1〉ち
  - 〈・中世の文学①〉
- (13) 宇治川〔1〕〈3〉
  - 〔・古典①〕〈・古典①・歴史文学の人々①・評論の精神①〉
- (14) 木曾最後〔0〕〈2〉



〈・古典①・平家物語①〉

(15) 坂落〔0〕〈1〉

〈・平家物語①〉

(16) 扇〔8〕〈2〉

〔・日本の古典①・古典の鑑賞①・古典の世界①・古典入門①

・古典から①・古典のかおり①・古典に触れて①・昔の物語

①〕〈・中世の文学②〉

(17) 弓流〔2〕〈0〉

〔・古典の世界①・古典を学ぼう①〕

(18) 先帝御入水〔0〕〈1〉

〈・平家物語①〉

(19) 能登殿最後〔0〕〈1〉

〈・中世の文学①〉

(20) 大原御幸〔0〕〈5〉

〈・中世の文学②・古典①・物語文学①・物語、草子①〉

一見して明らかのように、中学校では、「忠度の都落ち」「扇」が、それぞれ頻度8で圧倒的に多い。提出単元は、いずれも「日本の古典」「古典の鑑賞」「やさしい古典」などのように、古典入門型単元に属するが、いま、この二編について、各社の意図を概観すると、次のようになる。

(1)〔1〕 単元設定の趣旨

単元の目標

① 国民的教養としてわれわれの祖先の生活と思想とを理解し、正しく認識し民族的自覚を高める。——・どんな文学をもって

古典単元の定位と構成

いたか。・どんな生活をしていたか。・どんな考え方をしていたか。・時代による変化(社会的な背景)……。

② 古典がわれわれの生活にどんなつながりがあるかを考え、古典の現代的意義を理解する。

③ 日本のことばについての理解を深め、美的価値に対する鑑賞力を高めることによって、豊かな人間性を培う。——・原文に触れることによって古典のかおりを味わう。・表現の特色を調べ、用語と文体と思想の変遷を知る。

④ 古文の読解力を養い、国文学史のあらましを理解させる。この単元の目標は、必然的に右の各項に応じた学習目標となつて具体化される。

(2) 「忠度の都落ち」選定のねらい。

① 発達段階の上から見て、正義感が強いこの時期の教材として適当。

② 「平家物語」の情緒を代表する一編として、劇的な登場人物の心情を味わわせることができる。

③ 語学的な抵抗が比較的少ない作品であること。

④ 国民的生活感情に直結した内容をもっている。——・人間の真実を語っている。・優雅な美しさ。

⑤ この時代の人たちの考え方と現代の人々の考え方を比較することができる。

(3) 「扇」選定のねらい

(1) 社会科の学習と関連させて、源平の争乱の史実の社会的背景を理解させることができる。



(2) 与一の英雄的な活躍の叙事が、学習者の発達段階上の好みに合致している。

(3) 簡潔で的確な描写を味わわせることができる。

(4) 軍記物語特有の逞しいひびきを味わわせることができる。

(5) 劇的な登場人物の心情を味わわせることができる。

これらのねらいは、すべていずれも「興味ある古典」を、「生徒の実態に即して選んだり与えたりする」ことによって、「古典に親しみ、その内容をくみとり、祖先の思考や心情を知ること」の、古典学習の究極の目的に統一されるし、さらにこれらは、

1. 古典に対する興味・関心に関するもの。

2. 時代やその時代の人々の生活・思想・感情に関するもの。

3. 古典と現代とのつながりに関するもの。

4. 表現の古典的特色や、古語と現代語の相違に関するもの。

などの細目に整理することができる。

それでは、こうした目標やねらいをうけついで、どのように学習が展開されるか。もとより学習指導は、理想的には生徒の実態に即して、教師個々によって行なわれる。ここで、これら個々の指導形態に論及することはできないが、いま、こころみに上記の「忠度の

都落ち」を教材とする中学国語教科書の「指導書」が学習指導の方法として示す方向について検討を加えてみる。いずれも、単元の目標をうけて、いわばこの学習展開の模式として示されたものである。

## [2] 単元構成

### A 情趣・叙情型

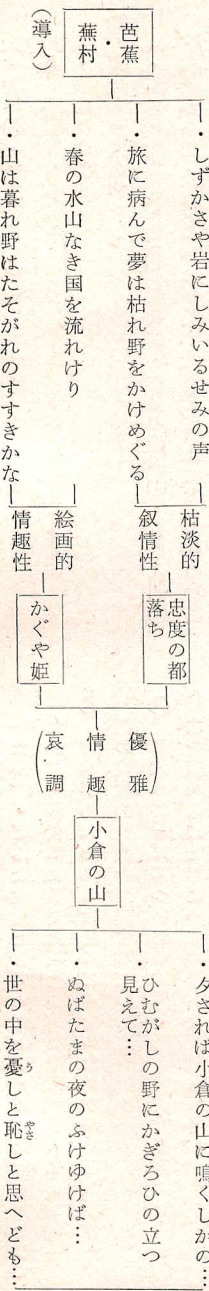
1 芭蕉・蕪村

3 かぐや姫

4 小倉の山

右は、「芭蕉・蕪村」によって、俳句の鑑賞を通して俳句的叙情を印象づけ、あわせて「忠度の都落ち」「かぐや姫」への導入をはかり、「小倉の山」での万葉集の歌の鑑賞を通じて、この単元の情趣性を統一しようとしているように見える。いまこれを、教科書本文によって図式的に整理すると、次の図式のようになる。

選ばれた素材を貫いているものは、静的な情趣、叙情、優雅、哀調であり、時代区分にしたがえば、近世—中世—古代である。文学形態からは、俳句（近世）—物語（<sup>中世</sup>古代）—歌謡（古代）と、史的にも、ジャンル別にも明確に秩序づけられている。「指導書」では、導入過程で「できれば年代順、ジャンル別に分類させる」とあるが、これは、こうした配慮をふまえた上でのことと思われる。





以上、見てきたところによれば、Aの場合には、単元構成、導入、展開での文学史的主知性と、情趣的教材本文による規範性が指摘できよう。いわば、ここに流れているものは、成人感覚や成人的郷愁による古典性の強調にほかならない。

## B 文学史型

この型によっているK社本によって見ると、まず単元の第一に、解説文「日本の古典文学」が用意されている。ここでは、古代、中世、近世の文学史の大意が述べられる。ついで、中世の代表的古典として「平家物語」（忠度の都落ち、宇治川）と、「狂言」（清水）を、近世のそれとしては「雨月物語」（夢底の鯉魚）を提出している。この社では、単元目標の第一に、「日本の古典に関する知識を整理し、古典に対する認識をもつ。」と、古典の知識理解を挙げているが、これは、そのまま右の単元構成にもうけつがれている。ここにも古典学習での文学史的な主知性があらわに示される。これはたとえば、「指導書」によれば学習計画の上でも、導入段階に四時間を当て、

- (1) これまでに学習した日本の古典についてまとめる。(二時間)
- (2) 日本の古典を展示し、巻末の「日本文学史年表」について話しあう。(一時間)

## (3) 古典の学習方法について話しあう。(一時間)

となつてゐるが、たとえば、(2)では、「これまでに学習した日本の古典を整理する。……『日本文学史年表』と結びつけて全体の中の位置を知る。」などの解説があるが、ここに見られるものは、あくまでも日本文学史における古典の知識理解と、その価値性の強調で

## 古典単元の定位と構成

ある。そうすることによって、古典学習についての興味と意欲を刺激、古典に対する認識を基調として、教養のために祖先の生活態度や、思考様式を理解しようとする読書態度を確立させようとしている。

## C 言語・言語史型

この型の場合は、右のA・B二型のとんどが、いわゆる古典入門型単元を設定したのちがつて、言語的側面（たとえば「文語と口語」：）より古典への接近をはかろうとする。単元の目標にも、次のような諸点が掲げられるのがあつうである。

- (1) 原文に触れること<sup>※2</sup>によって、古典への関心をさらに深め、古典を読めるといふ自信を持たせる。
- (2) 国語、国字問題について目を開かせる。
- (3) 文語文の読解に慣れる。
- (4) 文語文と口語文はどういうところがちがつてゐるか考える。
- (5) 現在なお生きている文語があるが、それはどういうものか。なぜ生きているのかを考える。

いうまでもなく言語・言語史的な目標が大きな比重をもっているが、単元構成の面では、たとえばN社本では次のようになってゐる。

## 1 忠度と俊成（現代語訳） 2 きつね塚（原文）

## 3 白石とシローテ（解説文中原文挿入）

## 4 学問のすすめ（原文）

「忠度と俊成」を現代語訳で提出の趣旨としては、「これを入力として、生徒が原文を読みたいという気持ちを起こすように」指導するとある。「きつね塚」では、「この文章のかなづかい、歴史のかなづかいである。」と注記して、古典原文への接近をはかり、



「白石とシローテ」では「西洋紀文」の原文を、口語体の解説文中に挿入する連鎖方法によっている。「学問のすすめ」で、はじめて原文をそのまま提出する方式をとっている。さらに単元末の「文語と口語」（解説文）では、「つれづれ草」の一節や、明治の短歌や俳句、はては小学唱歌、格言、新聞の見出し等によって、文語文体に慣れさせようとしている。こうした周到なまでの配慮は、すべて原文によって直接に古典に触れることを目的としたものにほかならない。

## 4

ところで、ここに掲げたA、B、Cの型は、はたしてさきに述べた自然な古典学習（学習者の興味、関心、必要、能力などに応じた）の基本条件を満足させるものであろうか。

入門期の古典学習を、どの程度に、また、どのような方法で行うかについては、まだ明確な答えが用意されていないが、「基本的なものに適宜触れさせ」という学習指導要領の指示は、A、B、Cの学習形態では、いずれもやはり前述のように、定評のある古典の体系的理解の意味に解釈されているように見える。右の三例では、いずれも導入過程で、古典文学の体系的理解をめざそうとし、それによって、学習古典の価値や、それによってその文学史上の序列系統を認識させようとする。既述のようにA、B、Cの導入過程には、それぞれ次のようなことが見える。

A できれば年代順、ジャンル別に分類……。

B 「日本文学史年表」と結びつけて……。

C 書名または人名を年代別に分類……。

しかし、入門期の古典学習で、はたしてこうした体系的整理の学習過程がどれほど必要であらうか。また、こうした文学史上の定位がなければ、古典は学習者に近づき得ないであらうか。古典の学習は、たとえば文法の学習に言われるように、もっと機能的でなければならぬ。特に入門期におけるそれは、もっと生活的でなければならぬ。文学史的に整理し、作品の解説や、その作品の時代や歴史的現実との結びつきによって、作品を文学史的に理解させ、その展開をたどる方法、また、ジャンル別にその展開をたどる方法などは、いわば形式文法の学習の方法に通ずる。文法の学習が、機能的に、学習者の現実のことばから出発し、そこにことばの通則を発見させる機能文法の方法をとらなければならないように、古典の学習指導も、学習者の現実の文学的関心から古典への可能性を発見し、価値を発見させる方法をとらなければならない。古典学習では、その形式的文化主義がまず克服されなければならないことになる。

古典学習の生活化、機能化とは、いわば古典の文学史的整理や体系づけの方法とは逆の方向をたどることである。文学史的概観は決して不必要だということではないが、それは、学習過程での補助的な手段でなければならぬ。旧版・新版いずれの「学習指導要領」でもその文学史的整理や、系統的な知識理解は、中学校の古典学習には求められていない。こうした段階は、むしろ高等学校での作業になる。古典文学の系統的整理は、あくまでも目的ではない。古代、中世、近世という時代区分や、その時代ごとの文学の概観も、日本の思考様式の系譜をたどる一助とはなり得ても、それは文学研究であ



り、文学の鑑賞ではない。むしろ、こうした定式的な時代区分や概観によって導かれた古典学習は、方法を誤れば、逆に古典をいっそう学習者からひきはなすことになる。たとえば、外国文学の作品が教材として採られる場合、いちいちその背景や文学史的位置づけをしないと、同様に、古典作品の提示も自然なままがよい。「中学生になれば、興味ある古典や外国文学などを読んで……」と、昭和二十六年版の「学習指導要領」が示しているように、古典は、特別に「古典」として与えられるのではなく、作品として自然なかたちで与えられることが望ましい。いかに興味深く自然なかたちで作品に触れさせるか、そうすることによつてどのような姿勢で古典への開眼をはかるかが課題となる。入門期の古典の学習は、古典の文学的研究ではない。古典の文学史の価値や文学の価値と、古典教育資料としての価値は、かならずしも同じではない。

古典の文学的機能は、もとよりその伝統性にある。また、古典に親しむことが、その伝統的美的世界の享受にあることもいうまでもないが、感性的、情趣的な傾斜をもつ日本文学の古典の多くは、そのままのかたちでは、こんにちの入門期の学習者の志向とは結びつかない。この壁を無視して、あるいはこの断層をうずめることを目的として行われる代表的古典の世界観の強制は、かえって古典と学習者との断層をいよいよ深めることになる。さきのA型の例で言えば、芭蕉・蕪村（枯淡）、「忠度の都落ち」・「かぐや姫」（哀調・情趣・優雅）などを代表として示される日本文学の伝統と、入門期学習者の文学的志向との間には違和感がある。こうした古典的思考様式や美的感覚は、なお根強く日本の特性を形成しているし、一面

では、少女期のセンチメンタリズムに相通するものも持っている。しかし、それらは、もはやこの時期の学習者の共感としては普遍性をもち得ない。心情を豊かにし、教養を高めるという古典学習の究極の目標を、直線的に意識し、これをせっかちに古典のもつ情趣性にあてはめ、芭蕉・蕪村、「忠度の都落ち」：はては、「枕草子」「源氏物語」にそれを求め、そこに古典の伝統性を定着させることには疑問がある。古い国文学の古典文学観によつて、古典が定式化された価値体系として典型化され、それがそのまま国語教室にもちこまれることは危険である。「平家物語」での「忠度の都落ち」の頻度の高さや、「枕草子」「奥の細道」などの圧倒的な採用状況は、このおそれをじゅうぶんに感じさせる。

ひるがえって考えてみると、「忠度の都落ち」に代表される中世貴族群の情感的人間関係や、その没落の過程に象徴的に開花した哀調にみちた中世的美意識が、はたしてどれだけの共感と人間形成へのエネルギーを中学生たちに与えることができるであろうか。また、このエピソードを通して形象化された忠度や俊成の風雅が、どれだけこんにちの中学生たちの生育にはたき得る機能をもつであろうか。古典が現在に生きるということは、たんに情趣や懐古趣味によって生きるということではない。はげしくはないが、古典が現代との接点において燃焼していることにほかならない。うもれ火の燃焼を発見し、古典的知性を習得するには、多くの時間と訓練を必要とするばかりではなく、その発見と感得にはかなりの人生経験が必要とする。まして、わずかばかりの教材古典の学習によつて、「新しい文化創造の鑑としての古典の意義を理解する」（A社本）ことな



どは、思いもよらぬことである。教材として与えられる古典群の多くに示される人生態度の詠嘆性や、わび・さび・あはれの孤独性、隠退性が、発達期の青少年たちの文化創造にどれだけ寄与するというのであろうか。

昭和三十四年版「中学校国語指導書」では、「古典の学習についても、他の読み物との調和を考えた上で：基本的なものに触れさせ：」と解説しているが、この意味からも、われわれは、古典教材の定位、単元構成に当っては、他の教材群とのじゅうぶんな調和を考へる必要がある。「他の読み物との調和を考えた上で」どうすれば興味深く、自然に、しかも機能的に古典を与えることができるか。青少年たちの人間形成にはたつきかけることができるかを、学習者の実態の上に立って見究めておく必要がある。もっと人生に対して肯定的な古典を、「平家物語」について言えば、「ひよどりこえ」や「宇治川」のような作品を、古典教材として定位させたい。ここに形象化せられる青年性、行動性は、入門期生徒の心理に通じ、古典への共感のあしがかりともなる。古典認識の基盤ともなり得る。

## 5

以上の観点に立って、古典単元の定位と構成についての基本的な事項について私見を示す。

(1) 既成の古典価値観からの脱却。——青少年たちを、中世的隠退的な心性に導くことは許されない。古典の学習が、教育であるかぎり、そこには、当然、何らかの教育的意図がなければならないが、これは、成人感覚の強制や、中世的な枯淡や情趣の強調ではない。

祖先の残した文化遺産の中から、こんにちの青少年たちの思考と結びつき得るものを発見し、その中に、古典の知性を感得させたい。したがって、これには、発達段階や性別、能力群別その他に対する配慮が必要になる。

(2) 古典の中からこんにち的な普遍性をもつものを発見する。

——これは、一見して便宜主義のように見える。しかし、古典がこんにちなおおけるぎない燃焼をつづけるのは、そこに何らかの恒久的な普遍性を包蔵しているからにはかならない。生徒たちも感動できるもの、生徒の目からも評価にたえ得るもの（解説や特別の知識を必要とせずに）を発見し、他の読み物との調和を考えた上で、過度にわたることなく与えることが望ましい。入門期の中学生ということを意識するあまり、童話古典だけに、その感動のよりどころを求める方法は誤まっている。童話古典に形象せられる世界に対しては、この期の生徒はさほどの感動を示さない。いわばこれらはこの期の生徒に対する普遍性をもつものではない。教材として異論の多い「枕草子」の「春はあけぼの……」でさえ、単元設定さえ当を得れば、こんにち的普遍性をもつことができる。たとえば、中学生たちの日記や、樋口一葉の日記などとともに、「日記」「文章をねる」などの単元によつて単元構成するとすれば、「春はあけぼの……」その他に示される簡潔な筆致のこんにち的普遍性を、じゅうぶんに認識させることができるのではなからうか。

(3) 発達段階に応じた訓練。——学習者の実態の尊重とは言っても、自然生育的な発達や興味だけに依存することではない。ここには、当然、発達段階に応じた訓練が必要になる。判断力や批判力は、



たんに素朴な興味や関心だけでは養われない。古典を、現代文学や外国文学の作品とともに正当に認識する能力を養うための教育的配慮が必要である。これは、(2)の場合と同様に、単元の定位、構成によって具体化される。一例を挙げるなら、たとえば、ガルシン作の「信号」などと、「宇治川」「扇」などを、同一単元内に定位させる方法などはどうであらうか。こうすることによって、両者の発想の普遍性または異質性が発見できようし、そこにはまた、こんなに混質的にはあるが、青少年たちの中に流れている日本の特性を自覚させることもできる。その特性の強さ、弱さの問題の判断、批判も可能になる。ここに古典の世界の正当な評価方法も導き出される。伝統と継承の問題も、必然的な課題として浮かび上ってくるにちがいない。

(4) 古典享受の協同性を尊重。——古典を規範的に享受させようとすることはまちがっている。また、逆に古典的世界や思考様式の限界や挫折を、なまのままで教えることも、入門期の学習方法として適切でない。現在に対する認識も、まして古典の世界や、その背景もじゅうぶんに理解していない入門期生徒に、そうした限界や挫折の実感の追求が可能はずはない。古典の学習でたいせつなことは、古典のそのままの享受にある。作品が、作品として伝えているおもしろさを、形式、思想、感情などの面からすなおにつかむことである。しかも、それをうけつものは享受者である。もとよりこれは、固定的なものではなく、学習者の経験や生長の深さによっても異なるし、読書能力によっても傾向差をもっている。感動や認識のしかたや次元が問題になるが、そこにはおのずから同一生長期と

いう共通性がある。その共通性の基盤の上に立って、異質な享受者、すなわち学習者としての生徒の協同的な感動を尊重しなければならない。学習者が教室という協同の場において感動できる作品——それは日本文学の古典の中では、数少ないものかも知れないが、これの選定がすなわち、「古典は基本的なものに……」として示される基本的な古典でなければならない。

※1 ①徒然草 ②枕草子 ③奥の細道 ④玉の小櫛 ⑤去来抄

⑥更級日記 ⑦平家物語 ⑧源氏物語 ⑨土佐日記 ⑩大鏡

⑪伊勢物語 ⑫方丈記 ⑬花伝書 ⑭古事記 ⑮狂言 ⑯謡曲

⑰近松の作品 ⑱竹取物語 ⑲玉勝間 ⑳宇治拾遺物語 ㉑今昔物語 ㉒民話・伝説 ㉓難波土産 ㉔日本永代蔵 ㉕雨月物語

㉖世間胸算用 ㉗笑話 ㉘ういやまぶみ ㉙西鶴諸国咄

③〇十訓抄 ③①蘭学事始 ③②三冊子 ③③歎異抄 ③④古今著聞集

③⑤蜻蛉日記 ③⑥花鏡 ③⑦折たく柴の記 ③⑧伊曾保物語 ③⑨風土記

④⑩爰の小文 ④⑪おらが春 ④⑫十六夜日記 ④⑬沙石集 ④⑭一九の作品

④⑮三馬の作品 ④⑯柴門の辞 ④⑰正徹物語 ④⑱新花摘

④⑲本朝桜陰比事 ④⑳無名抄 ④㉑鶉衣 ④㉒堤中納言物語 ④㉓おあ

ん物語 ④㉔野ざらし紀行 ④㉕毎月抄 ④㉖日本書紀 ④㉗栄華物語

④㉘吾妻鏡 ④㉙東関紀行 ④㉚勧進帳 ④㉛みとり日記 ④㉜西洋記聞

④㉝戒語抄

※2 口語文と対照、もしくは現代語訳や解説文の中にサワリの部分

部分、原文で挿入。